漢詩を味わう

第57回

秦の始皇、方士徐福を遣わし、
童男女数千人を将いて海に入り、
蓬莱の神仙を求めしむれど得ず、
徐福 誅を畏れ 敢えて還らず、
遂に此の洲に止まる

（『後漢書』東夷列伝）

熊野灘遠景

応制賦三山（おうせいさんざんにふす）

絶海中津（ぜっかいちゅうしん）

熊野峰前徐福祠
満山薬草雨餘肥
只今海上波濤穏
萬里好風須早帰

熊野峰前（ほうぜん）　徐福（じゅふく）の祠（し）
満山の薬草　雨余（うよ）に肥ゆ
只今　海上　波濤（はとう）穏やかなり
万里好風　須（すべか）らく早く帰るべし

《応　制》皇帝の命をうけて詩を作ること。
《雨　餘》雨の恵み。または雨上がり。
《三　山》中国東海にある仙人の島、蓬莱・方丈・瀛洲のこと。

熊野の峰の前に徐福の祠がある。
この山いっぱいにはびこる薬草は、雨の恵みをうけて立派に成長している。
今の世は東の海もおだやかだから、万里に吹きわたるよい風に乗って、ぜひとも早く中国に帰られよ。

三山は中国の東海に浮かぶ想像上の神仙の島です。古書によれば仙人が住み、不老不死の霊薬があり、金銀や玉で作られた宮殿が建っていたとされます。秦時代、神仙の術を修めた方士（仙人の術を行う人・修験者）の徐福は、始皇帝に不老不死の霊薬を献上すると上奏し、始皇帝の命をうけて神仙の島を探す旅に出ます。この折に数千人の少年少女や多くの技術者を従えたといいます。ところが、何年かかっても全く成果があげられず、徐福は処罰を恐れて消息を絶ち中国に戻ることはありませんでした。

絶海中津は日本の南北朝時代から室町時代にかけて生きた僧です。中国明時代の洪武元年（一三六八）に禅を学ぶために中国に渡り、十年近く中国に滞在しました。この詩は明の太祖・朱元璋に謁見したさいに作った詩です。朱元璋は絶海中津にちょうど位置的に日本の方向に浮かぶ神仙の島や、徐福について尋ねたのでしょう。前半の二句はそれに答えて日本に徐福を祭る風習があることを詠んでいます。

朱元璋は乞食僧から身を立て、白蓮教徒の紅巾の乱などに乗じて皇帝の座まで登りつめた明の初代皇帝です。太祖となってからは「文字の獄」と呼ばれる知識人の大虐殺や、役人の粛清を生涯にわたって行った暗君として知られています。しかし絶海中津は「只今海上波濤穏やかなり」と太祖の治世が素晴らしいと賛美し、そして始皇帝を恐れて帰らなかった徐福に、今は明主が治める時代だからよい風に乗って早くお帰りと勧めます。明の太祖に謁見して、たちどころに作った詩ですが、日本と中国を結ぶ伝説を題材に太祖へのお世辞も加えています。絶海中津の機知と才能がいかんなく発揮されている詩と言えるでしょう。

『漢書』には徐福が日本に「百工五種（あらゆる技術と五穀）」をもたらしたことが書かれています。そして熊野には捕鯨や農耕を日本に伝えたのは徐福であるという伝説が今なお残っているといいます。現在各地に徐福ゆかりの地がありますが、和歌山県新宮の徐福の墓や、三重県熊野市の郊外波田須の浦の徐福を祭る神社がとくに有名です。

参考文献：漢詩の世界（大修館書店）・漢詩への誘い（ＮＨＫ出版）

竹屋深雪を囲み　林間路の通ずる無し　暗香留まり住まらず　多事是春風

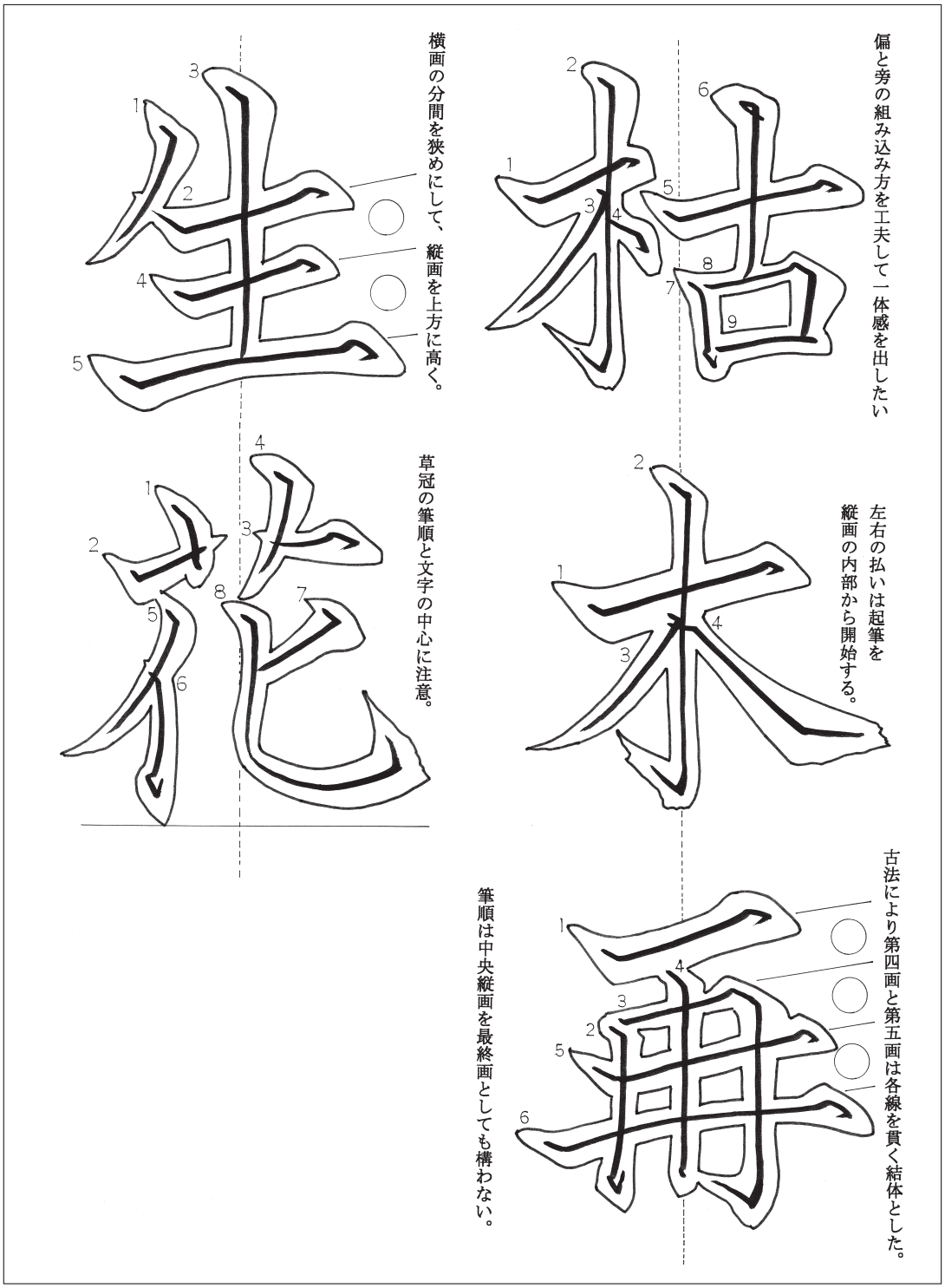
《大意》竹ぶきの家の周りに雪がうず高く積り、林の道も雪に閉ざされてしまった。しかし、梅花の香りだけはひとところにとどまらない。どこからともなく春風がしきりに運んできてはまた運び去ってゆく。（蔣錫震）

雪竹寒翠を垂れ　風梅晩春に落つ

《大意》雪を帯びた竹は寒そうに緑色垂れ、風に吹かれる梅花は春の暮れに飛散する。（林浦）

佐藤象雲書

読み　枯木に再び花を生ず（枯れ木に再び花が咲く。無心のうちに本来持っているものがよみがえってくる。「碧巌録」）



一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

行　書

草　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

隷　書

次号課題

春星 草堂に帯（お）ぶ

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

ペン字部課題　（２月28日〆切）

細字部昇格試験課題　（３月４日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

細字部昇格試験課題実施要項

・左記の三体千字文の一節を所定用紙に揮毫
・欄外に支部・段級・氏名を明記して下さい
・〆切三月四日（火）・受験料二、〇〇〇円

佐藤象雲　書

音　シシンシュウコ　エイスイキッショウ

略解　薪を指しくべると燃え尽きないように、絶えず善行を積めば幸は絶えない。幸福は一朝に来るものではなく、吉事は自然とくるものである。

※今月の月例出品はお休みです。

支部

順位

氏名

人は行く末も知らず ふるさとは

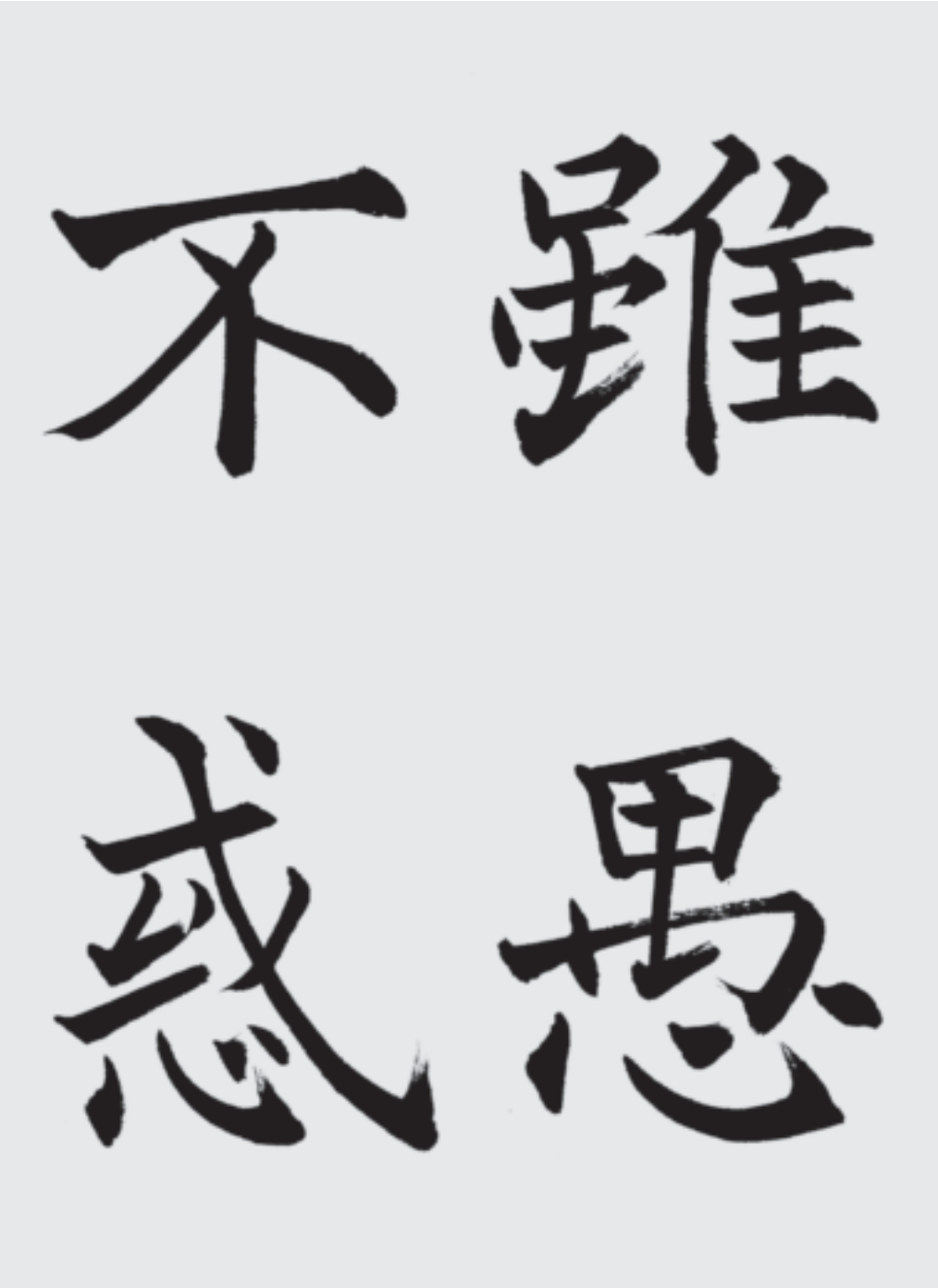
花ぞ昔の香に匂ひける

和泉溪石　先生書

雖愚不惑

愚と雖（いえど）も惑わず……

■褚遂良（ちょすいりょう）・雁塔聖教序（がんとうしょうぎょうのじょ）（初唐・西暦六五三年）の臨書(16)

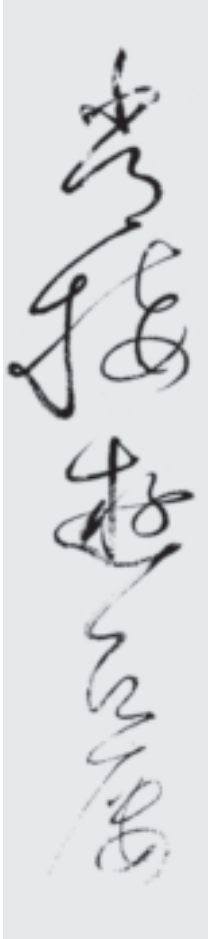


象雲臨

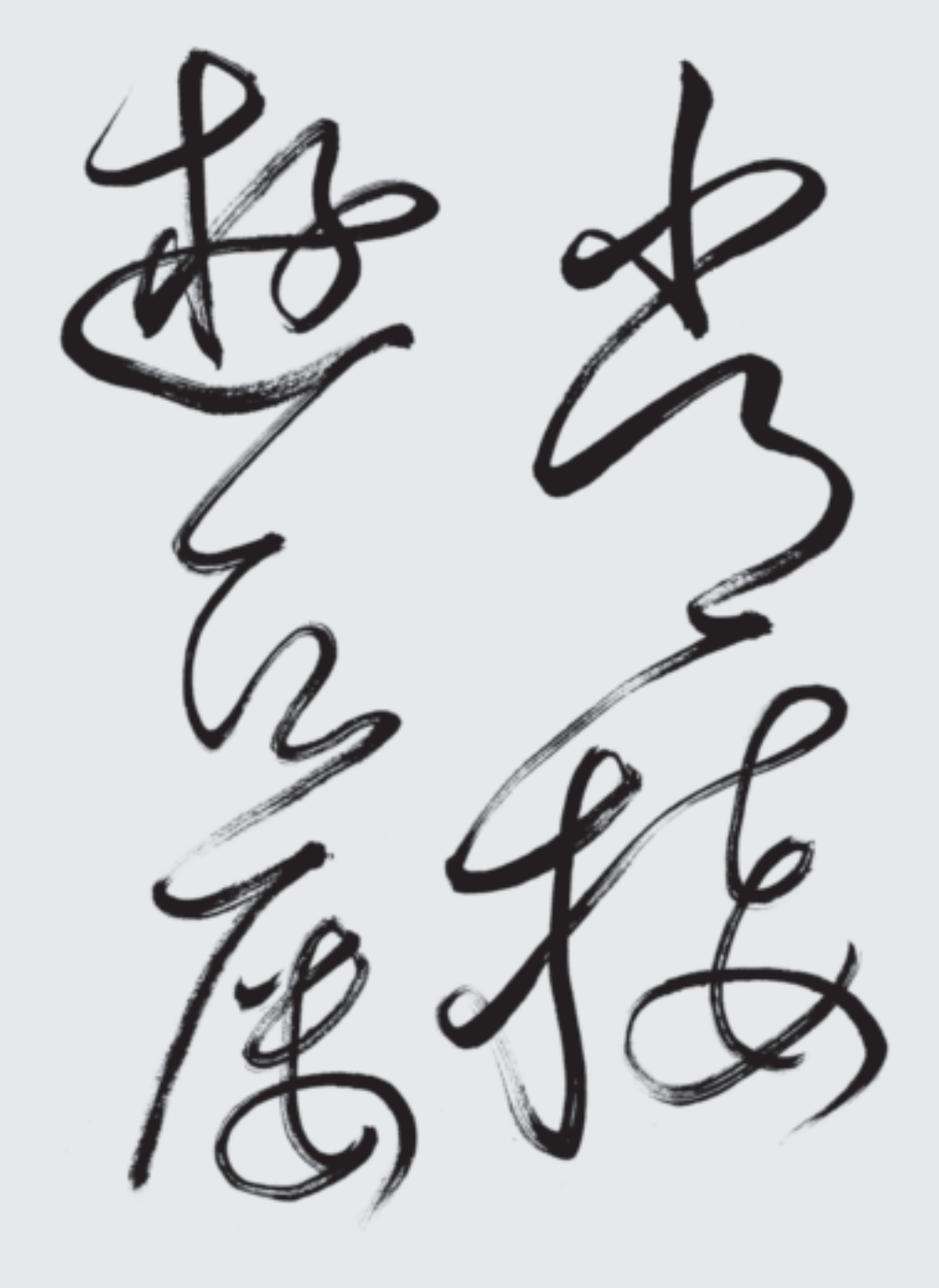
『雖愚不惑』

褚遂良は虞世南・欧陽詢より若いため、二人の長所をとりいれながら独自の書法を完成したと言われます。初唐の三大家といわれるこの三人の中では一番華麗典雅な風趣を湛えていますが、書論を読んでみると唐時代の評価は毀誉相半ばしています。特に「述書賦」には「王羲之の真意を得ず、当時流行したが後学者を堕落させた罪は浅くない」とまで書かれ、形式美と技巧に過ぎたことが一部の反発を招いたようです。しかし、現在までの大多数の評価は高く、「初唐の書風を極めて格調高く華麗優美」という評言が適切です。

今月の四文字は例によって細線を主体として、線の微妙な向背の変化と接筆の工夫によって明るい結体です。



常に遊居に接し、屢（しばしば）……



象雲臨

■懷素（かいそ）・自叙帖（じじょじょう）（中唐・西暦七七七年）の臨書（8）

『常接遊居屢』

今月は前回より帖の中程まで進んで「常接遊居屢」の五文字を臨書します。この部分は直筆で綿々と綴った細線の絡みが見事で、狂草の面目躍如といったところでしょうか。前々号の「古典探訪」で、張旭について解説しましたが、この「常に遊居に接し、屢……」のくだりは、懷素が若い時に張旭の家を訪ねて、しばしば激励されて筆法を伝授されたという文の一節です。

懷素のこの自叙帖は文字のデフォルメが活発で文字群によってバランス・アンバランスの様相が激しく変わります。今月のこの行は曲線が非常に美しく、転折では角を立てずに流れが自然です。書を「見る音楽」と評することがありますが、まさに線が美しいハーモニーを奏でるようです。急ぎ書きせずに、緩急のリズムを大切に臨書してください。